

都市文化研究センターの活動

栄原 永遠男

記載の範囲

本号には、平成16年7月1日から12月15日までの事態を記録する。中間評価関係では、一部これよりさかのぼって報告する。

中間評価

① 5月19日に実施されたヒヤリングの結果、21世紀 COE プログラム委員会（人文科学）評価部会事務局から、6月7日および6月11日付で、8月31日（火）に約1時間程度の再ヒヤリングを実施する旨の連絡を受けた。

② 7月8日付で、21世紀 COE プログラム委員会人文科学評価部会長から、「21世紀 COE プログラム（平成14年度採択拠点）中間評価再ヒヤリングの実施について（通知）」が大学あてに送付され、7月9日付の学長から文学研究科あての文書で、書類作成の依頼があった。21世紀 COE プログラム委員会からの文書には、

別添1「中間評価再ヒヤリング質問事項まとめ」

別添2「中間評価再ヒヤリングの実施について」

の2つの別添資料が添付されており、8月20日までに別添1の回答および出席者名簿の提出が求められた。また、追加の説明資料がある場合は当日30部用意して説明するように求められた。

別添2では、再ヒヤリングは8月31日13時から約45分で実施すること（拠点リーダーから質問事項に対する回答等20分、質疑応答20分程度、審議5分）、場所は独立行政法人日本学術振興会一番町第2事務室 FS ビル会議室であること、出席者は、「拠点プログラムの将来構想等について責任をもって対応できる方、及び拠点リーダーを含め4人以内とす

る」ことが指示されていた。

別添1の質問事項は、つぎの9項目からなる。

〈進捗状況等〉

1. 採択時の実施計画と現時点での進捗状況との食い違いについて、説明願いたい。また、今後2年間で当初の目的が達成できるのかどうか、具体的に説明いただきたい。
2. 海外における多様なシンポジウムに基づく成果について、具体的に説明いただきたい。
3. 本プログラムを構成する各プロジェクトの連携・統合について、単に各プロジェクトの束とならないための具体的な方策について説明いただきたい。
4. 調査研究が本プログラムのテーマと合致し、その成果が十分に反映されているかについて、具体的に説明いただきたい。
5. 学内の他の研究科との関係で、事業推進担当者及び協力者の補充等の可能性について説明いただきたい。
6. 国際的な情報発信の実績と今後の現実的可能性について、具体的に説明いただきたい。
〈大学院教育及び若手研究者の育成等〉
7. 博士課程の学生及び若手研究者の人材育成について、どのような知識を持った人材が育っているか、具体的に説明いただきたい。
〈世界最高水準の研究教育拠点としての水準と現状〉
8. 世界最高水準の研究教育拠点について、国内及び海外の当該分野において、それぞれの程度認知されているか、具体的に説明いただきたい。
〈最終年度に期待される成果について〉
9. 本プログラム終了後の展望について、具体的に説明いただきたい。

③ これを受けて、7月23日（金）の第26回センター会議および8月18日（水）の第21回常任委員会を開き、状況の分析、対応策の検討を行い、次項で述べる事務局会議の準備した1~4の書類等のチェックを行い、了承した。また、再ヒヤリングには、阪口拠点リーダー、栄原常任委員長、井上事務局員に加えて、金児曉嗣学長の出席をお願いすることを決定した。

金児学長にこのむね要請し、了承を得た。

④ 以下のように事務局会議を開いて、対応策の

検討ならびに提出書類、プレゼンテーション画面等を作成した。

- 第1回 7月12日(月) 16:30~17:30
- 第2回 7月15日(木) 16:00~18:00
- 第3回 7月21日(水) 14:30~17:30
- 第4回 8月3日(火) 15:00~17:00
- 第5回 8月18日(水) 15:00~19:00
- 第6回 8月25日(水) 13:30~21:00

これらの会議によって用意した資料は、以下の通りである。

1. 「21世紀 COE プログラム」中間評価再ヒヤリング質問事項に関する回答
2. 「拠点リーダーから質問事項に対する回答」の文案
3. 追加説明資料
 - (1)国際シンポジウム等一覧
 - (2)刊行物一覧
 - (3)海外調査一覧
 - (4)学位論文テーマ一覧
 - (5)就職先一覧
4. パワーポイントによるプレゼンテーション画面(16画面)

表紙

 - (1)実施計画・進捗状況・見通し(文字説明)
都市文化研究センター刊行物(写真)
 - (2)海外シンポジウムとその成果(文字説明)
海外シンポジウムと成果の例(見取り図)
 - (3)各プロジェクトの連携・統合(文字説明)
 - (4)調査研究のテーマと成果(文字説明)
海外での評価 インドネシアの新聞『ブルナス』の記事(写真)
 - (5)学内他研究科との連携
学内他研究科との連携(見取り図)
 - (6)国際的な情報発信
 - (7)若手研究者の育成
学位取得者数(COE 研究員)(立体棒グラフ)
 - (8)世界最高水準の研究教育拠点
大英博物館展への協力(写真)
 - (9)本プログラム終了後の展望(文字説明)
- ⑤ 台風接近のため、大事を取って、前日の8月30日(月)に阪口・井上・榮原の3人は東京へ行った(金児学長は当日)。予定通り、8月31日(火)13時から13時45分まで、再ヒヤリングを受けた。
- ⑥ 11月26日付で、21世紀 COE プログラム委員会、委員長江崎玲於奈の名前で、学長宛に「21

世紀 COE プログラム」平成14年度採択の研究教育拠点の中間評価の結果の公表について(連絡)」が送付された。その内容(公表分のみ)は、以下の通りである。この内容は、独立行政法人日本学術振興会のホームページ上で公表されている。

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

◇21世紀 COE プログラム委員会における評価(総括評価)

このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、下記のコメントに留意し、当初計画の適切なる変更が必要であると判断される。

(コメント)

世界最高水準の研究教育拠点を実現するために必要な方策が不十分である。強固な意思と明快な戦略、担当者たちの並外れた努力が必要である。

新たな理論やモデルの提示はなされておらず、現段階では世界水準に達した研究成果もほとんど出されていない。質の高い研究成果の公表は、拠点形成の最低の必要条件である。研究成果の質や発表方法の質を高めるために、経費配分の優先順位を検討し直す等により、研究計画を変更する必要がある。

「都市文化学」を新しい学問分野に発展させるという当初の意図は進展を見せておらず、「都市文化学」は依然として曖昧なキーワードのままである。都市文化の世界的な研究・教育拠点となるには、現存する学問分野を基礎に、研究計画を早急に変更する必要がある。現代都市論、現代文化論を無視することはできないし、政治経済との関連抜きに研究を進めるわけにもいかないはずである。サブ・センターの位置づけ、利用法も再検討する必要がある。

英語による公表、英語によるホームページの整備は不可欠だが、充実した内容、適切な英語表現がその前提である。

- ⑦ 11月30日付で、21世紀 COE プログラム委員会、委員長江崎玲於奈の名前で、学長宛に「21世紀 COE プログラム」中間評価結果について」が送付された。

そこでは、以下の点が指摘された。

- (1)今回の中間評価の資料としたのは、「各大学に提出していただいた進捗状況報告書、

拠点形成計画調書（採択時、中間評価時）、採択時における審査結果等」である。

- (2)文部科学省に次年度の交付申請書を提出される時に併せて、今回のコメント等を踏まえて改めて計画調書をプログラム委員会に対して提出を求めることになる。
- (3)上記の公表されたコメントに加えて、「特記事項」が示された。その内容は、再ヒヤリングの評価は厳しいものであったが、実施計画に沿った研究の進展、大学による支援体制の強化、大阪市との連携の深まりも認められる、コメントを考慮して学長と拠点リーダーのリーダーシップで十分に議論して推進するように、などであった。
- ⑧ 以上のコメント等にもとづいて、事務局で内容の分析、対応策の検討に入った。

調査・取材

- ① 7月7日付で、21世紀 COE プログラム委員会事務局から、「「21世紀 COE プログラム」（14年度採択）の大学院学生の在籍及び学位授与状況・就職先状況等について（依頼）」が大学に届き、7月9日付の学長から文学研究科長あての文書によって作成が求められた。

これは、平成13年度から平成16年度について、「事業推進担当者が所属する全ての専攻等を対象とする」もので、21世紀 COE プログラム委員会評価部会（分野別）の資料とされるとともに、文部科学省にも情報提供するという。

回答すべき内容は以下の通り。

別表1

- 「大学院学生の在籍及び学位授与状況」
それぞれ外国人留学生数を（ ）内に内数で示す。
- 博士課程入学定員（各年度4.1現在）
博士課程入学者数（各年度11.1現在）
うち、他大学出身者数
うち、事業推進担当者が指導教員となっている者
- 博士課程在籍者数（各年度11.1現在）
うち、事業推進担当者が指導教員となっている者
- 課程博士授与数（各年度3.31現在）
うち、事業推進担当者が指導教員となっている者
- 論文博士授与数（各年度3.31現在）
うち、事業推進担当者が指導教員と

なっている者

「就職先状況（事業推進担当者が指導教員となっている者で、博士課程を修了した者）」

- ポスドク（同一大学）
ポスドク（他大学等）
大学の助手・講師
公的な研究機関
企業（研究開発部門）
企業（その他の職種）
その他

別表2

「RA・ポスドクとしての在籍者数(概ね1年以上の在籍を確約している者)及びその他の雇用者について」平成13～16年度

COE 経費で雇用している者

RA

ポスドク

その他

その他の経費で雇用している者（学内経費、科研費、外部資金等）

RA

ポスドク

学振特別研究員

DC（COE 含む）

PD

別表3

「大学院学生の在籍及び学位授与状況」

「就職先状況」

「その他」大学内における RA 規程、COE 研究員規程等添付する資料名を記入
以上につき、7月29日に事務局を通じて回答した。

- ②「桂小米朝のハートフル大阪」（テレビ大阪）
8月5日（木）に取材を受けた。
8月28日（土）に「大阪市大の研究は、世界レベル」として放映された。
この件は、当番組のホームページに掲載されている。

http://www.tv-osaka.co.jp/ip4/heartfull/hoso/1182971_1297.html

北京・サブセンターの整備

北京・サブセンターの整備にあたって、中国社会科学院歴史研究所と協議するため、井上浩一事務局員が、A チームの井上徹氏と北京に出張した（7月26日～28日）。この件については、「北京・サブセンターについて」参照。

COE 事務局の活動

- ① 再ヒヤリングに備えて、対応策の検討、提出書類・プレゼンテーション画面等の作成を行った（前述）。
- ② 来日した外国人 COE 研究員、招聘研究者（文学研究科客員研究員）の研究室の確保およびそこでの研究環境の整備（IT 環境等）を行なった。ゲストハウス宿泊、学術情報総合センター利用者カードの発行の手配をした。
- ③ 『都市文化研究』第4号を配布・発送した。
- ④ バンコク・サブセンターで開催されたフォーラムに、井上浩一事務局員が出席し、あわせて同センターの管理について協議した（12月6日～10日）。
- ⑤ 図書の管理体制を改善した。122室の書架を保管庫に変え、COE 会議室（121室）に書架を入れて資料の整理を行なった。
- ⑥ COE 事務室の IT 環境の整備を進めた。また、関係書類の整理、FD の整理、備品の整備等、事務環境の改善に努めた。

常任委員会・センター会議の開催

〔常任委員会〕

- 第21回 8月18日（水）10時～12時
第22回 12月24日（金）9時～12時

〔センター会議〕

- 第26回 7月23日（金）10時～12時
第27回 9月27日（月）10時～12時
第28回 11月10日（水）10時～12時
第29回 12月24日（金）13時～16時
以上、いずれも開催場所は文学研究科長室

A チーム「比較都市文化史研究」の活動

柴原 永遠男

A チーム運営委員会の開催

- 第26回 7月26日（水）11:30～12:30
第27回 9月10日（金）11:00～12:30
第28回 10月23日（土）10:30～12:00
第29回 11月17日（水）17:15～18:00
第30回 12月15日（水）17:15～18:00

事業計画と推進状況

本チームは六つの事業計画を設定した。それ

ぞれの計画内容と本期における事業推進状況は次の通りである。（ ）内は責任者。

- (1) 「(平成15, 16年度) A チーム(比較都市文化史研究)研究会」(井上浩一)
月例研究会を中心とし、海外研究者を招いて適宜シンポジウムを開催する。（「研究会」の項参照）
- (2) 「(平成15年度) 都市文化創造において歴史的都市の文化伝統が果たす役割に関する比較研究」「(平成16年度)歴史遺産と都市文化創造」(井上浩一)
 - ① 平成16年度は、アジア地域を中心とし、かつ都市文化創造の拠点としての博物館に焦点を当てる。大阪、上海、釜山、バンコクを予定。
 - ② 大阪歴史博物館と協力して準備中である。
 - ③ 平成16年11月にシンポジウムを開催する。（第28回研究会として実施）
 - ④ シンポジウム等の成果は、報告書として刊行する予定である。
- (3) 「(平成15, 16年度) 前近代の日本と中国における都市の比較的研究ー北京サブセンターを拠点とした日中研究交流ー」(中村圭爾)
「北京・サブセンターについて」参照。

研究会

第23回研究会

平成16年7月11日（水） 13:30～17:00

経済学部棟2F 第4会議室

書評会：塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』（山川出版社 2004年3月）

報告：八木 滋（大阪歴史博物館学芸員）

飯田直樹（大阪歴史博物館学芸員）

戸田州彦（大阪市立大学大学院文学研究科大学院学生）

第24回研究会

平成16年7月21日（水） 9:00～11:30

田中記念館 第3A 会議室

村井良介（大阪市立大学大学院文学研究科大学院学生・COE 研究員）「尾道浄土寺鐘相論と小早川氏」

西尾泰広（大阪市立大学大学院文学研究科大学院学生・RA）「近代南王子村の地域社会構造」

第25回研究会

重点研究との共催シンポジウム「近代大阪の都市文化」（「重点研究について」参照）

第26回研究会

「近現代フランスの都市空間と生活文化」
（京都大学大学院文学研究科21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」との共催）

平成16年9月25日（土） 13:30～17:00

京大会館（京都市左京区吉田河原町15-9）

マリ=クロード・ブラン=シャレール

（Marie-Claude Blanc-Chaleard）（パリ第一大学教授）「下町から多民族街へ：過去と現在のパリにおける外国人の空間」

アニー・フルコー（Annie Fourcaut）（パリ第一大学教授）「両大戦間期におけるパリ郊外の欠陥分譲区画問題」

第27回研究会

平成16年10月23日（土） 13:30～17:00

経済学部棟2F 第4会議室

井上浩一（大阪市立大学大学院文学研究科教授・COE 事業推進担当者）

「聖遺物の都コンスタンティノープル 「エデッサの聖像」と944/5年の帝位交代」

コメント

- 1) 岡田精司（元三重大学人文学部教授）
「皇位の象徴一宝器の鏡と剣」
- 2) 中林隆之（COE 研究員）
「称徳・道鏡政権の仏舎利出現劇」
- 3) 図師宣忠（COE 研究員，京都大学）
「西欧中世における聖人崇拜と聖遺物」

第28回研究会

ミニ・シンポジウム

「歴史遺産と都市文化創造Ⅱ」

平成16年11月13日（土） 13:00～17:00

学術情報総合センター1F 文化交流室

報告（いずれもスライド等使用）

佐藤隆（大阪歴史博物館学芸員）「大都市上海の歴史遺産と博物館事情」

岸本直文（大阪市立大学大学院文学研究科助教授・COE 事業推進協力者）「釜山における歴史遺産の保護と活用」

多和田裕司（大阪市立大学大学院文学研究科助教授・COE 事業推進協力者）「多文化都市クアラルンプールにおける文化の創造

と競合」

北川央（大阪城天守閣主任学芸員）「大阪城・上町台地における文化イベントの展開と史跡・文化財」

討論

総合討論（2年間の成果）

第29回研究会

シンポジウム「中国都市の時空世界」

平成16年12月18日（土） 10:00～17:00

学術情報総合センター1F 文化交流室

第一部「明清時代」 10:00～12:00

司会 井上徹（大阪市立大学大学院文学研究科教授・COE 事業推進協力者）

范金民（南京大学歴史系教授）「明代の南京における政治転変と都市経済」

吉尾寛（高知大学人文学部教授）「華北の都市一檔案に見る明末の都市防衛問題によって一」

第二部「宋代」 13:00～15:00

司会 平田茂樹（大阪市立大学大学院文学研究科助教授・COE 事業推進協力者）

呉松弟（復旦大学歴史地理研究所教授）「宋代都市文化に与えた移民の影響」

塩卓悟（関西大学非常勤講師）「宋代の食文化—北宋から南宋への展開—」

第三部「魏晋南北朝時代」 15:20～17:20

司会 東晋次（三重大学人文学部教授）

中村圭爾（大阪市立大学大学院文学研究科教授・COE 事業推進担当者）「建康における伝統と革新」

佐川英治（岡山大学文学部助教授）「北魏洛陽の形成と空間配置」

第30回研究会

平成16年12月22日（水） 10:00～12:00

田中記念会館第2会議室

呉松弟（復旦大学歴史地理研究所教授）

「宋代都市文化研究の現状」

国際交流

(1)研究者招聘

- ① 呉松弟氏（復旦大学歴史地理研究所教授）を12月12日から12月30日まで招聘し，第29回，第30回研究会を中心に研究交流した。

Bチーム「現代都市文化研究」の活動

山野 正彦

前号(第4号)掲載の平成16年6月以降におけるBチームの活動について報告する。

(1)メンバーの異動について

事業推進担当者であった豊田ひさき教授(教育学)は平成16年7月31日付で退職した。同氏の担当していた華東師範大学教育科学学院との共同研究は、木原・添田両助教授(教育学・COE事業推進協力者)によって引き続き行われる。一方COE事業推進協力者として土屋貴志助教授(哲学)が加わった。

(2)研究会・講演会・公開シンポジウムの開催

平成16年11月末までに下記の研究会・講演会を開催した。

第28回研究会

平成16年7月14日(水)

10:00~11:05 運営委員会

平成16年度事業計画の遂行状況について報告・審議。

13:00~15:00 公開講演会

文学部355実験系実験実習室

講演: ポンサック・ワダナシンドゥー

(Pongsak Vadhanasindhu) (チュラロンコン大学建築学部景観建築学科・学科長・PhD) “River and Canal as the Foundation of Urban Culture and Tourism Development”

公開シンポジウム

(日本都市社会学会との共催)

「都市空間に働く権力作用と人間——大阪をく都心周縁>から読み解く——」

平成16年9月4日(土) 13:30~16:30

学術情報総合センター 会議室

報告

- ①西村雄郎(広島大学)「インナーリングエリア『再生』の課題」
- ②水内俊雄(大阪市立大学・COE事業推進担当者)「マイノリティ/周縁からみた戦前・戦後の大阪の空間と社会」
- ③青木秀男(都市社会学研究所)「野宿と排除と抵抗/運動——大阪の野宿者世界から——」

司会 谷富夫(大阪市立大学・COE事業推進担当者), 橋爪紳也(大阪市立大学・COE事業推進担当者)

第29回研究会

平成16年9月9日(木) 13:30~15:00

文学部355実験系実験実習室

報告: 桑原瑞来(COE研究員)「都市文化としての創作和太鼓——楽器店を中心とする太鼓ネットワークの形成と音楽的展開」

第30回研究会

平成16年10月20日(水) 10:00~11:15

運営委員会

ジョクジャカルタ・バンコクでのフォーラム開催ほかについて討議

第31回研究会(講演会)

平成16年11月1日(月) 16:30~18:00

講演: Luiza Bialasiewics (イギリス・ダラム大学) “Missing Cities: the political geographies of memory”

第32回研究会

平成16年11月16日(火) 15:00~18:00

文学部355実験系実験実習室

報告: 山口智(COE研究員)「ランナー・タイ文化の継承と復興運動」

大橋庸子(大阪市立大学大学院文学研究科大学院学生)「<観光日本>の語られ方、語られなさ」

Claudio Minca (イギリス・ニューカッスル大学) Tourism, Landscape and Modernity

(3)海外での活動

前号掲載のもの以降、12月までの教員・COE研究員等の海外での調査のための出張は下記のとおりである。

山口智(COE研究員)

平成16年8月18日~9月17日

タイ王国

ランナータイにおける文化復興運動についての調査

石田佐恵子(COE事業推進担当者)

平成16年9月16日~9月22日

- 大韓民国
アジア太平洋社会学会にて COE 研究調査
の成果発表
山野正彦(COE 事業推進担当者)
平成16年9月28日～10月5日
タイ王国
バンコクサブセンターの運営・管理および
環境モノグラフ調査
中生勝美(COE 事業推進協力者)
平成16年10月7日～10月15日
中華人民共和国
上海市における都市化の歴史的系譜の解明
に関する調査
水内俊雄(COE 事業推進担当者)
平成16年10月11日～10月15日
中華人民共和国
上海市における都市経済・社会・建造環境
の現状と課題に関する調査
添田晴雄(COE 事業推進協力者)・木原俊行
(COE 事業推進協力者)・佐藤真(兵庫教育大学
助教授)・堀田龍也(静岡大学助教授)・袁齊(文
学研究科大学院学生)
平成16年10月11日～10月15日
中華人民共和国
シンポジウム「都市における学校改革とカ
リキュラム開発」参加と学校視察
中川眞(COE 事業推進担当者)
平成16年10月19日～11月9日
インドネシア共和国
環境モノグラフ調査および第3回ジョク
ジャカルタ・アカデミックフォーラム参加
山野正彦(COE 事業推進担当者)
平成16年11月27日～12月14日
タイ王国・ラオス人民民主共和国
環境モノグラフ調査および第3回バンコ
ク・アカデミックフォーラム参加・発表
石田佐恵子(COE 事業推進担当者)
平成16年12月7日～12月12日
タイ王国
環境モノグラフ調査および第3回バンコ
ク・アカデミックフォーラム参加
山口智(COE 研究員)
平成16年12月7日～12月4日
タイ王国
環境モノグラフ調査および第3回バンコ
ク・アカデミックフォーラム参加・発表

(4)海外からの招聘研究者

平成16年7月10日～25日にタイ国チュラロン
コン大学建築学部都市景観建築学・学科長のポ
ンサック・ワダナシンドゥー博士が招聘研究者
として来学された。受入教員は橋爪紳也助教授
(COE 事業推進担当者)であった。ポンサック氏
はタイにおける著名な景観計画研究者の一人で
ある。本学滞在中に上記の講演会でバンコクの
水辺景観についての講演を行ったほか、橋爪助
教授とともに大阪市内の河川をはじめ各所を視
察され、大阪の水辺景観の整備計画に関する活
発な意見交換を行った。

Cチーム「都市の人間研究」の活動

高梨 友宏

平成16年8月から11月までのCチームの活動に
ついて報告する。

1 構成員

チームの構成員については本誌前号に所記以
降変化がないため、メンバーの列記は省略する。

2 サブセンターへの派遣事業

1) ロンドン・サブセンターの利用

6月22日～7月20日：市川美香子教授(英語
英米文学)が利用した。

2) ハンブルク・サブセンターの利用

9月3日～9日：大阪市立大学プロジェクト
研究「ハンブルクと大阪：都市・市民・文化・
大学」の一環として、ハンブルク大学アジア・
アフリカ研究所で開催された同名の国際シン
ポジウムへの参加のため、金児曉嗣教授(大
阪市立大学学長・COE 事業推進担当者)、柴
原永遠男教授(COE 事業推進担当者)、阪口弘
之教授(COE 事業推進担当者)、松村國隆教授
(COE 事業推進担当者)、高梨友宏助教授(COE
事業推進協力者)が同大学に派遣された。

期間中、サブセンターは上記被派遣者によ
って有効に利用された。

なお、このプロジェクト研究の詳細に関し
ては、柴原永遠男教授による「ハンブルク・
サブセンターについて」を参照されたい。

3) 今後の派遣計画

ロンドンおよびハンブルク・サブセンター
に関しては、現在のところ確定的な派遣計画

はない。

3 研究活動

当該期間中のCチームの主な研究活動として特記すべきは、芝原宏治教授(COE 事業推進担当者)、山崎弘行教授(COE 事業推進協力者)、田畑雅英助教授(COE 事業推進協力者)、高梨友宏助教授(COE 事業推進協力者)を中心に、国際シンポジウム「都市のフィクションと現実」が企画開催されたこと、および、湯浅雅子氏(大阪教育大学非常勤講師)と杉井正史助教授(COE 事業推進協力者)を中核メンバーとする「大阪市立大学演劇研究会」が COE-C チームの研究事業の一環として発足したこと、また、山口久和教授(COE 事業推進担当者)が華東師範大学人文学院との間で進めている共同研究が、第2回目の国際シンポジウムを開催したこと、これら3点である。なお、前2者の内容の詳細については、別項「シンポジウム『都市のフィクションと現実』について」および「市大演劇研究会発足について」を参照されたい。

このような大規模な催しが複数開催されたこともあり、当該期間中の研究例会の開催回数はペースダウンせざるを得なかった。

以下、研究例会、講演会などの内容と開催日時を、開催日時の順に記す。

国際シンポジウム

「都市のフィクションと現実」

9月13日(月)～14日(火)

両日とも10:00～17:30

学術情報総合センター10F 会議室

(報告者、報告内容、司会、経過等の詳細については、「シンポジウム『都市のフィクションと現実』について」を参照されたい。)

第1回 演劇研究会

10月7日(木) 16:30～19:20

比較言語文化情報処理実験室(128号室)

1. 研究会発足確認
2. 湯浅先生出発前の打ち合わせ、確認
3. 研究報告
杉井正史(COE 事業推進協力者)「『女殺油地獄』における転覆と封じ込め」
(「演劇研究会」発足の経緯、趣旨、目的等については、別項「市大演劇研究会発足について」を参照されたい。)

シンポジウム

「都市ベルリンの言語・文学・文化」

(ドイツ文学会との連携企画)

10月23日(土) 13:00～

田中記念館第2会議室

研究報告

1. 鈴木 潔(同志社大学教授)「ベルリン、都市形成と文化」
2. 神竹道士(大阪市立大学大学院文学研究科助教授)「ドイツ語文法書にみられる郷土愛——都市ベルリンの文法家の場合——」
3. 竹田和子(大阪市立大学非常勤講師)「フォントナーとベルリンの文芸雑誌」
4. 三上雅子(COE 事業推進協力者)「愛されざる首都——20年代ベルリンの光と影——」
5. 津田聖子(大阪市立大学大学院文学研究科大学院学生)「『ファービアン』と『点子ちゃんとアントン』——ケストナーの描く都市ベルリンと子ども——」
6. 芝田江梨(大阪市立大学大学院文学研究科大学院学生)「映画都市ベルリン——UFAの盛衰——」

第2回大阪市立大学 COE・華東師範大学人文学院国際シンポジウム

「中国における都市型知識人の諸相——近世・近代知識階層の観念と生活空間——」

10月28日(木)～29日(金)

両日とも10:00～16:30

文化交流センター 大セミナー室

(共催：大阪市立大学中国学会)

(詳細については、「上海サブセンターについて」を参照されたい。)

第22回研究会

11月29日(月) 16:30～

法学部棟6F 第2会議室

研究報告

1. 森久佳(COE 研究員)「都市化・産業化に対応するデューイ・スクール(Dewey School)の試み」
2. 足立匡敏(COE 研究員)「精神医療と短歌——都市から〈監護〉される患者——」
(研究例会後、チーム運営委員会を開催)

シンポジウム

「都市のフィクションと現実」について

芝原 宏治・田畑 雅英・高梨 友宏

COE-Cチームは、9月13日(月)、14日(火)の2日にわたって、COE国際シンポジウム「都市のフィクションと現実」を、大阪市立大学学術情報総合センターにおいて実施した。議論の適度な広がりや収束を意図して企画者(芝原・山崎・田畑・高梨)が設定した4つのパネルの名称と報告者名および報告タイトル等は次のとおり。

1. 都市の色彩と音楽(第1日午前)

- (1)芝原宏治(COE事業推進担当者)「都市と創造的遭遇」
- (2)a. 林嵐娟「中国人と日本人の色彩感覚」
b. 李瑞芳「故郷と色彩語——鲁迅と太宰治の場合」
- (3)田島昭洋「ウィーンと音楽——シューベルトの〈さすらい〉」
- (4)浅岡宣彦(大阪市立大学大学院文学研究科教授)「ペテルブルクと音楽——『スペードの女王』について」
- (5)酒井秀樹(大阪市立大学大学院生活科学研究科講師)「色と音の共感覚」

2. 都市と映画・演劇(第1日午後)

- (1)ミリアム・ローデ(ハンブルク大学助教授)「港町の映画——大阪とハンブルクを例に」
- (2)湯浅雅子(大阪教育大学非常勤講師)「近松門左衛門『女殺油地獄』で河内屋与兵衛がみた夢」
- (3)アラン・カミングズ(ロンドン大学講師)「河竹黙阿弥と明治歌舞伎の犯罪地理」
- (4)張新民(COE事業推進協力者)「上海と初期中国映画——1920年代『モダン映画』に表されている『魔都』上海」
- (5)都築政昭(情報科学芸術大学教授)「映画で世直しを——黒澤明論」

3. 都市と夢・幻想(第2日午前)

- (1)田畑雅英(COE事業推進協力者)「生と死の幻影——『死都ブリュージュ』と『死の都市』」
- (2)a. 国光圭子(大阪市立大学大学院学生)「都市市民の喪失した夢——グリム童話の舞台としての『森』」
b. 宇佐美三恵(同)「内なる異界——ティー

クのメルヒェンにおける『森』と『都市』」

- (3)小西嘉幸(COE事業推進協力者)・鈴木田研二(大阪市立大学非常勤講師)「啓蒙のユートピアにおける都市の表象——ティソ・ド・パトをめぐる」
- (4)イアン・リチャーズ(大阪市立大学大学院文学研究科助教授)“On Being a Provincial”(通訳 坂井隆)
- (5)丹下和彦(関西外国語大学教授)「アテナイ——喜劇『リュシストラテ』を透かして見るその都市像」

4. 都市のフィクションと現実(第2日午後)

- (1)高梨友宏(COE事業推進協力者)「都市とメディア」
- (2)アンドレアス・レーゲルスベルガー(ハンブルク大学講師)「人形芝居におけるフィクション性とリアリズム——人形を論じるクライストと近松」
- (3)名和久仁子(大阪市立大学大学院学生)「紀海音考——近世上方の文人の素顔」
- (4)山崎弘行(COE事業推進協力者)「ケルト復興運動と都市文化——イエイツの国柄神話について」
- (5)スティーヴン・ドッド(ロンドン大学助教授)「国木田独歩——帰還不能の地」

最初のパネルで報告された芝原の「都市と創造的遭遇」は、実際にはシンポジウム全体の導入部である。芝原は、異なるものの出会いが創造活動においていかに重要であるかを強調したあと、都市文化と呼ばれるものからフィクション(およびフィクションにつながるもの)が除去されたら、豊かなものが、突然、貧しくなると述べ、真と思込まれた偽なる命題群としてのフィクションが存在することを忘れてはならないにせよ、実に対する虚としてのフィクションによって育まれない都市文化は存在し得ないと主張して、本シンポジウムにおける様々なものの出会いが大阪市立大学大学院文学研究科のめざす都市文化学の創造につながることを願うと締めくくった。

今回のシンポジウムは、昨年度のシンポジウム「都市とフィクション」の続編とも言える性格のものである。それゆえ、昨年度シンポジウムにおいて梶井基次郎の短編小説「檸檬」の色彩表現を取り上げて自と他(self and other)の関係性を論じたスティーヴン・ドッド氏(ロンド

ン大学 SOAS 日本・韓国言語文化学科代表) の報告「曖昧な都市——梶井基次郎における自己と他者」を受ける形で、最初のパネル「都市の色彩と音楽」は実質的に始まった。まず、林氏は、大阪と北京および上海で行った色彩調査をもとにして中国人と日本人の色彩感覚について、とくにその違いについて論じ、これを受けて説き起こした李氏は、都市と対をなす故郷に焦点を絞り、魯迅の「故郷」と太宰治の『津軽』における色彩表現に注目して、自と他の問題を中国人の立場から考察した。一方、都市と音楽を扱った田島氏は、ウィーン市民に歌われたシューベルトの「さすらい」がもつ都市的性格を、自身の肉声による歌唱をまじえながら語った。また、浅岡氏は、プーシキンの小説『スペードの女王』と、これをもとにしたチャイコフスキーの同名のオペラを比較して、ロシアの都市ペテルブルグを論じた。このパネルをしめくくったのは「色と音の共感覚」を扱った酒井氏である。氏は、調性と色、および、音高と色の対応関係を示したあと、音高が一定値以上になると、調整にかかわりなく、対応する色として黄色が選ばれることを実験結果を通して指摘し、都市景観を破壊しかねない黄色について多彩な資料を駆使して語った。

質疑応答の時間では、創造的遭遇ということについてさらに説明してほしいという要望、ことばとそれが指し示す色とを話の中で分かりやすく区別してほしいという意見、梶井の色彩表現についてはどのように考えるかという質問などが出され、それぞれに対して、パネリスト側からの返答があった。

2番目の「都市と映画・演劇」は、色と音を含む表現形式としての映画と演劇を参加者とともに考察すべく設定したパネルである。最初のスピーカーであるローデ氏は、大阪とハンブルクを舞台にした映画において港がどのような役割を果たしてきたかを論じ、映画の中の大阪とハンブルクの、相違点と相似点を指摘した。また、イギリスで英語による近松作品の上演を長く手がけてきた湯浅氏は、「女殺油地獄」で河内屋与兵衛が何を思って豊島屋へ無心に行ったかを近松は明らかにしていないとし、そこをどのように読むかで「女殺油地獄」の演出が変わってくると述べた。これに対して、カミングズ氏は、河竹黙阿弥の「島衛月白浪」を取り上げ、物理的都市空間の地理と、劇空間の地理との間に設定された関係に注目しつつ、犯罪物語の形

で示される逸脱の、近代化する社会における位置を論じた。また、張氏は、1920年代上海を舞台とする「モダン」劇映画を取り上げ、「魔都」と呼ばれた上海のイメージがどのように作り上げられていったかを論じた。これら4氏の報告に比べると、黒澤映画を取り上げた都築氏の報告はやや論調が異なる。「どうして人間は、もっと仲良く、もっと楽しく暮らせないかという事、もっと善意に生きられないかという事」を自分は映画の中で追求したという黒澤のことは引用して、氏は黒澤映画に流れる愛の思想を、終始、力説した。

引き続いて行われた全体討論は、各報告に対する質問に報告者が答えるという形で始まったが、開始時刻がすでに予定の終了時刻に近かったために時間が足りず、参加者はレセプション会場へ移動して、歓談の場で個別的に意見を交換した。(都築氏の報告を聞いた外国の若者たちが、会場のそこそこで、黒澤映画をもう一度見たくなくなったと語っていたのが印象的であった。)

第2日午前の「都市と夢・幻想」は、夢や幻想が生起する場としての都市と、幻想の中に表象される都市という両面を、近代都市から古代ギリシアのアテナイまで、おおむね時間軸を遡りながら探求しようと試みる企画である。田畑は、ブリュージュを舞台にした19世紀末の作家ローデンバックの小説と、それを原作とする20世紀の作曲家コルンゴルトのオペラを比較しつつ、生と死が幻影を介して相互に侵食しあう場として描かれた都市について考察した。國光氏は「森の国」ドイツの、森を舞台にした典型的なメルヒェンと考えられている『ヘンゼルとグレーテル』を取り上げ、実際にはグリム兄弟の時代にはすでに森が大幅に減少し、著者も読者も都市民であった事実を指摘し、そうした状況のなかであえて「森のメルヒェン」が記録された意味について考察した。それを受けて宇佐美氏は、伝承文芸としての民話のスタイルを模した創作メルヒェンの最初の重要な作家であるティークの作品を取り上げ、メルヒェンが都市民の内面の深層を描き出す器に変容した様相を論述した。小西氏と鈴木田氏は、前啓蒙主義期の作家ティソ・ド・パトの二作のユートピア旅行記をそれぞれ一作ずつ取り上げ、そこに描かれた理想都市・理想社会のイデーの様相と意義について考察した。リチャーズ氏は、自身の生地ニュージーランドのパーマストーンノースを例

に、都市と田舎町の中間的な存在である「プロヴィンシャル」(provincial)の文化的特質と意味について考察した。丹下氏は、アリストパネスの喜劇『リュシストラテ』に描かれた、アテナイの女性たちが要求貫徹のためにアクロポリスを占拠するという、現実には起こり得ない物語が上演されたことの意味を探り、そこに都市アテナイの成熟度の高さを見る発表を行なった。

第4パネル「都市のフィクションと現実」は、「都市」、「現実」、「フィクション」という3つのキーワード相互の間に取り結ばれる多様な関係の彩を、美学や文学史研究の立場から際立てようとする。すなわち、最初に高梨は、現代都市の現実が、様々なメディアによって深い次元まで媒介されているために、そもそもフィクション的な様相を帯びている、と指摘し、こうしたフィクション的な現実へと対処すべき姿勢について考察した。高梨がいわゆる「現実」の「虚構」性を問題にしたのに対して、第2報告者レーゲルスベルガー氏は、虚実のあわいに生起する人形芝居という都市の文化の優れた特性を強調、「虚」の芸術活動における「現実性(リアリティ)」の問題を論じた。続いて名和氏は、近松門左衛門と同時代の浄瑠璃作者、紀海音(きのかいおん)の知られざる活動の一端を、新資料に基づいて明らかにし、近世都市における当代随一の文人にしてマルチ人間でもあった海音のプロフィールを描いてみせた。その活動の都会的多元性によって自らの「実」像を「虚」のヴェールに隠蔽した文人、海音の姿に対して、第4報告者、山崎氏は、「現実」に対して意識的に対置される「フィクション」の役割、および後者による前者の変革について自覚的であった文学者の姿勢を、W.B.イェイツの文学実践に即して提示した。すなわち、山崎氏によれば、英国産業革命の影響により急速な都市化の波に洗われるアイルランドの現実に対抗すべく、イェイツは敢えてケルト的理想の文学的構築を試みたのである。本パネルの最後にして、シンポジウム全体の締めを括ったドッド氏の報告も、先の山崎氏の報告と軌を一にし、都市化する「現実」への対抗軸もしくは都市化による喪失の補完としての「フィクション」の機能を、独歩の文学的実践の検討を通じて強調した。それは同時に、西洋を範とする"都市"と日本的伝統と結びつく"ふるさと"の間に働くダイナミズムこそが近代日本における文学創作の駆動力であった

とする氏の年来の主張を裏付けるものでもあった。

最後に行われた全体討論においては、現代都市におけるフィクションの意義ないし位置に議論が集中した。日常的に使用される「フィクション」は、少なくとも、「実」に対する「虚」として明瞭に意識された意味構築体と、「真」と誤認された「偽」なる報告(あるいは、物語、伝承、信念、など)の両方を包含する単語である。全体討論では、その単語が意味するものと現代都市とのかわりについて議論がなされたが、疲労と時間的制約のために収斂するところまでは行かず、この問題は、後日、別な形で取り上げることになった。

市大演劇研究会発足について

杉井 正史

今回、COE-C チームの中に、文学研究科内で演劇を研究する教員、COE 研究員、大学院生などからなる市大演劇研究会を発足させた。10月7日(木)に第1回研究会を開いた。この研究会発足の経緯を報告したい。

平成16年5月、堺市在住の演出家、湯浅雅子氏から、阪口弘之教授に、彼女が行っている近松の世話物浄瑠璃の英国学生による英語版での上演を大阪市立大学で行わないかという打診があった。彼女はリーズ大学でワークショップとして近松の世話物を上演していた。

阪口教授は、杉井と相談の上、演劇の研究会を発足させることを考えた。文学研究科内の各国演劇を研究する教員、COE 研究員、院生を組織して、演劇の研究会を発足させようという計画であった。賛同者を募ったところ、複数の賛同者を得たので、計画を推進することとなった。

東京とも異なり、京都とも異なる大阪という都市の文化の特色は、江戸時代に商業都市という機能を担った時代的背景と関係がある。経済活動に基盤を置く生活の中で、町民たちは独自の文化を発展させ、伝統を作り上げたのである。それは、東京の官製文化や京都の宮廷文化とは異なるものである。それを代表するのが歌舞伎と浄瑠璃である。いうまでもなく、近松門左衛門は浄瑠璃の完成者であり、彼の浄瑠璃は、人形と語りという媒介を使用して、現在のリアリ

ズム演劇以上にリアルに、町人の生活の中にある義理と人情の葛藤を表現したのであり、今まで続く上方文化の伝統を築いたのである。現在の大阪という都市の文化を考える際に、この伝統の考察は不可欠であり、近松の浄瑠璃作品を題材とし、演劇全般、とりわけその上演の要素に焦点を当てる研究は、大阪という都市の文化研究の一翼を担いとうと信じているのである。

湯浅氏の経歴は以下の通りである。

英国国立リーズ大学東アジア学部助教授及び同大学英文学部ワークショップシアター准助教授(1990～99)。同ワークショップシアター客員演出家(2003～04)。大阪教育大学非常勤講師(2002～)。

近現代日本演劇の研究が専門。岸田國士、別役実、岩松了等の書いた戯曲の英訳と舞台化の仕事を通して各劇作家の劇構造の研究をする。現在は近松世話物の浄瑠璃をもとに翻案戯曲を作成し、英訳して、英語上演することを目的とする「近松プロジェクト」を行い、近松劇のドラマの研究をする。2004年3月には『女殺油地獄』をリーズ大学で演出上演した。近松プロジェクトの二作目としては、『堀川波鼓』をハル大学演劇学部との共同研究として上演すべく現在努力している。

湯浅氏は、リーズ大学でワークショップとして、近松の『女殺油地獄』を演出した。このような近松の世話物を英国の大学の学生に英語で上演させ、その学生に日本でも上演させようという計画である。当初は、リーズ大学の学生による上演を考えていたが、同大学での教員の異動により、その計画が不可能となり、英国のハル大学の学生による大阪市立大学での上演へと変更した。

湯浅氏の紹介、研究のテーマ、研究会の規則、外国のツアーの経費、上演場所についての検討のために、数度の打ち合わせが必要であった。また7月8日(木)にはCチームの講演、9月13日(月)には国際シンポジウムのパネリストとして、研究発表していただいた。湯浅氏は、ハル大学での自らのプロジェクトの交渉のために、10月11日より渡英している。今回の渡英の際に、近松の世話物の英語版の大阪市立大学での上演についての交渉も行う予定である。

研究会開催

第1回研究会

日時 10月7日(木)16:30～18:00

比較言語文化情報処理実験室

杉井正史「『女殺油地獄』における転覆と封じ込め」

第2回は12月中旬に予定している。なお5月28日(金)、8月2日(月)、9月22日(水)に研究会の性格、目的、ハル大学劇団の招待についての打ち合わせを行った。

インターナショナルスクール 「比較文化交流論Ⅱ」について

中村 圭爾

本講義は、今年度は「日本、アジア、世界各国の都市文化交流史」を主題として、9月21日、22日、27日の3日間、各日5限で実施した。

今年度の講義の具体的趣旨は、都市の立地や形態、構造などの外面的要因および、都市の文化、社会、習俗などにいたる多様な視点にたつて、日本、中国、東南アジア諸国の歴史のおよび現代都市に関して、比較史的観点から都市文化の考察を行うものであった。

プログラムは、以下の通りである。

1 東南アジアの都市と都市社会

シスワディ・ダルモスマルト講師(インドネシア芸術大学メディア情報学部・副学部長:音楽研究)・中川眞教授(COE事業推進担当者, アジア都市文化学)「都市における伝統音楽の変容」

山野正彦教授(COE事業推進担当者, 地理学)「アジアの都市プランとコスモロジー」

早瀬晋三教授(歴史学)「アジア海港都市の特質と景観」

2 中国古代都城とその周辺への影響

牛来穎講師(中国社会科学院歴史研究所副研究員:隋唐都市史)「中国唐宋時代の都市空間と社会」

栄原永遠男教授(COE事業推進担当者, 歴史学)「古代日本の宮都」

中村圭爾教授(COE事業推進担当者, 歴史学)「中国の都城プランの形成と発展」

3 アジア近世都市の社会と秩序

ダニエル・ボッツマン講師(ハーバード大

学歴史学部準教授：近世法制)「刑罰・自由で考える19世紀日本」

山口久和教授 (COE 事業推進担当者, 中国学)「中国近世都市知識人の生き方と犯罪」

履修登録者は、2回生10名, 3回生13名, 4回生6名, 大学院前期博士課程1年生15名, 同2年生10名の計54名, および COE 研究員若干名であった。

重点研究について

塚田 孝

昨年度から発足した重点研究「都市文化創造のための比較的研究」は、①大坂の都市史研究それ自体を推進すること, ②大坂を念頭に置きつつ, 世界的規模での都市の比較史を推進することをめざしている。昨年度は(平成16年)2月に古代・中世の大坂に関するシンポジウムを開き, 3月には中国都市史に関するシンポジウムを開催した。これを受けて, 今年度は, COE-A チームと連携しつつ, 近世末から近代にかけての都市大阪に関するシンポジウム, ヨーロッパ都市を中心とするシンポジウムを計画した。このうち, 前者はすでに平成16年9月18日(土)に行われ, 後者は平成17年3月19日(土)に予定して準備中である。

9月18日に行われた「シンポジウム 近代大阪の都市文化」の内容は, 以下の通りである。

セッション1「19世紀・大阪の都市社会と文化」
八木滋(大阪歴史博物館)「近世後期大坂における市場社会と民衆世界」

飯田直樹(大阪歴史博物館)「大阪の都市社会と大阪相撲」

セッション2「大阪のメディアと社会文化事業」
土屋礼子(大阪市立大学)「大阪の新聞による女性読者の組織化」

津金沢聡廣(桃山学院大学)「大阪の新聞と社会文化事業」

佐和宏士(毎日新聞大阪社会事業団)「福祉を拓く一大毎慈善団から毎日新聞大阪社会事業団への93年」

中村茂高(朝日新聞厚生文化事業団)「関東大震災と朝日の社会事業」

片山宣博(産経新聞大阪新聞厚生文化事業団)
「障害者福祉と産経の福祉—施設から地域へ」
セッション3「関一の大坂都市論」

広川禎秀(大阪市立大学)「関一の民衆観」

芝村篤樹(桃山学院大学)「関一の大坂観と市政」

なお, このシンポジウムをはさむ9月15日(水)から24日(金)まで, 学術情報総合センター1Fのロビーで, 「大阪の新聞と社会事業」と題して毎日・朝日・産経各新聞社が実施してきた社会事業に関する資料や写真の展示を行った

これらの活動を推進するため, 開催された〔重点研究運営会議〕は, 以下の通り(前号掲載分以降)。

第8回 平成16年 9月10日(金) 10:00~11:00

第9回 平成16年10月13日(水) 16:30~17:30

第10回 平成16年11月17日(水) 16:30~17:15

第11回 平成16年12月15日(水) 16:30~17:15

第12回 平成16年12月24日(金) 14:40~15:00

第13回 平成17年 1月19日(水) 10:30~12:00
いずれも, COE 会議室で開催

上海・サブセンターについて

榮原 永遠男

はじめに

上海・サブセンターにおける華東師範大学との共同研究は, 人文ルート, 教育ルート, 法政ルートの3ルートで展開されている。6月26日から12月3日までの状況を報告する。各ルートの責任者(人文:山口久和, 教育:添田晴雄, 法政:水内俊雄)から提出された報告を, 榮原の責任で加筆・整理した。

人文ルート

〔講演会〕

中生勝美(大阪市立大学大学院文学研究科助教授・COE 事業推進協力者)「文化批判理論と日本の歴史認識」

日時 2004年10月14日(木)

場所 華東師範大学出版社大会議室

主催 華東師範大学人文学院

司会 高瑞泉(華東師範大学教授・人文学院院长)

参加者 教員，大学院生約50名

〔シンポジウム〕

前年度より継続している華東師範大学人文学院との共同研究「中国の近現代化と都市型知識人」に関する第2回目のシンポジウムを，10月28日（木），29日（金）の両日にわたって，大阪市立大学文化交流センター（大阪駅前第2ビル6F 大会議室）で開催した。

主催：大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター

共催：大阪市立大学中国学会

〔10月28日（木）〕

テーマ「中国における都市型知識人の諸相—近世・近代知識階層の観念と生活空間—」

午前 司会 山口久和（大阪市立大学大学院文学研究科教授・COE 事業推進担当者）

高瑞泉（華東師範大学教授・人文学院院长）

「五四期知識人の平等観念の研究」

川尻文彦（帝塚山学院大学文学部助教授）

「辜鴻銘の東西文明論」

午後 司会 高瑞泉

山口久和「近代の予兆と挫折—清代中期—知識人の思想と行動—」

張曉林（華東師範大学人文学院哲学系副教授）「陳独秀の宗教観の変化から見た現代中国知識人の精神的緊張」

〔10月29日（金）〕

午前 司会 松浦恆雄（大阪市立大学大学院文学研究科助教授・COE 事業推進協力者）

晋栄東（華東師範大学人文学院哲学系副教授）「都市公共領域と政治文化の関係—1911年前の李大釗の思想と実践—」

王標（COE 特別研究員）「清末江南における—帰郷官吏の読書と交遊—『越縵堂日記』（1865-71）を資料として—」

午後 司会 晋栄東

松浦恆雄（大阪市立大学大学院文学研究科助教授・COE 事業推進協力者）「文明戯の歴史的役割再考」

劉曉虹（華東師範大学人文学院哲学系副教授）「中国近代の個人観の転換と阻害—嚴復・梁啓超を中心として—」

今回は，前年度の共同研究の成果を踏まえつつ，さらに個別的・実証的な研究報告を行いたいという双方の要望から，テーマを「中国における都市型知識人の諸相—近世・近代知識階層の観念と生活空間—」に絞り，シンポジウムに

先立つ2ヶ月前から，双方で論文を交換し，十分批判的検討を加えた上で本番のシンポジウムに臨んだ。その甲斐あって，きわめて実質的な意見交換を行うことができ，今後の共同研究について大きな見通しを得ることができた。

今回のシンポジウムの成果は，まず年度内に国内で研究報告集（日本語版）を刊行し，来年度の前半期には，前年度の共同研究の出版物である『中国的現代性と都市知識分子』（上海古籍出版社）の続編の形で，中国語版を刊行する予定である。目下，高瑞泉院長と山口教授が頻繁にメールを交わしながら，中国側論文の日本語への翻訳，日本側論文の中国語への翻訳作業を鋭意進めているところである。

なお山口教授に対して，華東師範大学人文学院より COE との共同研究の一環として，2005年3月に清朝の都市型知識人に関する講演を人文学院で行うよう依頼があった。

教育ルート

2004年10月11日（月）～15日（金）の5日間，華東師範大学にて，次のような研究活動を行った（11日と15日は移動日）。

日本側からの参加者は，以下の通りである。

添田晴雄（大阪市立大学大学院文学研究科助教授）

木原俊行（大阪市立大学大学院文学研究科助教授）

佐藤真（兵庫教育大学大学院学校教育研究科助教授）

堀田龍也（静岡大学情報学部助教授）

水内俊雄（大阪市立大学大学院文学研究科教授・COE 事業推進担当者）

中生勝美（大阪市立大学大学院文学研究科助教授・COE 事業推進協力者）

袁齊（大阪市立大学大学院文学研究科大学院学生）

篠田尚子（大阪市立大学大学院文学研究科大学院学生）

中岡深雪（大阪市立大学大学院経済学研究科大学院学生）

12日（火）午前 上海市文来中学 視察

校長，教頭，第2学年学級担任教諭，情報科学技術科教科主任教諭，新総合科学学科教科主任教諭と面談。

文来中学の概要，カリキュラム開発・実践についての説明を受けた後，第1学年の英語，理科の授業を見学。

12日(火)午後 シンポジウム「都市における
学校改革とカリキュラム開発(上海)」(1)
華東師範大学教育科学学院
参加者約80名
総合司会 杜成憲(華東師範大学教育科学学
院長)

発表

王建軍(華東師範大学教育学系講師)「中国の
高等学校における研究的学習の状況調査分
析」

堀田龍也「総合的な学習の時間と情報手段の
活用」

コメンテーター 范国睿(華東師範大学教
育学系教授)

13日(水)午前 上海市静安区第一中心小学視察
校長, 副校長, 科学研究室主任教諭, 実践創
新科担任教諭, 自然科担任教諭と面談。

第一中心小学の概要, カリキュラム開発・実
践についての説明を受けた後, 創新実践科の授
業見学, 工作室, ロボット科教室を見学。

13日(水)午後 シンポジウム「都市における学
校改革とカリキュラム開発(上海)」(2)

華東師範大学教育科学学院

参加者約80名

総合司会 杜成憲

発表

添田晴雄「企業と保護者が支える学校基盤カ
リキュラム開発」

黄忠敬(華東師範大学教育学系講師)「探究性
学習における探究の道」

コメンテーター 范国睿

14日(木)午前

中国での単行本出版(2005年3月20日刊行)
にむけて, 翻訳, 入稿, 校正等のスケジュール
を調整した。また, 執筆字数や写真の挿入, 序,
まとめの章, 書名, 価格表示等について話し合っ
た。また, 予算の執行について意見交換を行っ
た。

14日(木)午後

杜成憲教授(華東師範大学教育科学学院長)
のご専門が科挙であることから, 杜教授自らの
案内により, 嘉定博物館の孔子廟, 科挙資料館
を見学。見学後, 華東師範大学にもどり, 予算
の執行, 来年度以降の研究計画について意見交
換を行った。

法政ルート

〔国際学会〕

International Conference on Urban
Changes in the 21st Century(21世紀の都市変
貌に関する国際会議)

6月29日(火)~7月2日(金)

華東師範大学自然地理楼

水内俊雄(大阪市立大学大学院文学研究科教
授・COE事業推進担当者)“Transformation
of the recent homelessness issues and its
policies for them in the capitalist
metropolises in the East Asia; The case
of Hong Kong, Seoul, Osaka and Taipei”

この会議は中国地理学会都市地理専門委員会
が4年に一度開く国際学会で, 今回は, 華東師
範大学の現代都市研究センターと, 上海のサブ
センター=現代都市社会研究中心の共催という
形で行われた。注目すべきことは, この前者の
研究中心を, 中国版COEである211プロジェク
トの目玉にするべく本大会を開催した点であ
る。

上海・サブセンターでの今後のコラボレ
ーションの貴重な機会となった。主催者である地
理学の寧越敏教授とも会談をもった。

〔資料調査・現地巡検・学会参加〕

① 7月15日~24日 西部均(COE特別研究
員)が, 上海図書館本館, 徐家匯蔵書楼(近
代欧文・日文資料館)で資料調査と現地巡検
をおこなった。この作業では, 以前よりお世
話になっている二松学舎大学院学生で華東
師範大学に留学中の川辺雄大さんの助力を得
た。あらためて感謝する次第である。この調
査は, 以下で述べる10月調査でも継続されて
いる。

② 水内俊雄(10月12日~10月15日), 中生勝
美(大阪市立大学大学院文学研究科教授・
COE事業推進協力者)・西部均(10月8日~
10月15日), 中岡深雪(大阪市立大学大学院
経済学研究科大学院学生)(10月8日~10月
22日), 篠田尚子(大阪市立大学大学院文学
研究科大学院学生, 陳映芳教授のもとに留学
中)のメンバーで, 華東師範大学との研究打
ち合わせ, 都市共同調査として上海の旧フラ
ンス租界北部と東部, 五角場や楊浦区の巡検,
そして上海図書館本館と分館において, 1930
年代の都市計画, 住宅地図に関する中国語・
日本語の文献調査を行なった。教育班の調査
にも協力し, 小学校と中学校の参観に合流し
た。

上海での収集資料は, 古本の購入も含めて,

リスト化しており、1949年以前上海の都市の社会的・文化的状況の復元、都市政策の一級資料や統計、地図も収集し、そのいくつかはPDF化作業を継続しており、年度内にHPにもあげ、可能なものは一部閲覧できるようにする。いずれにせよ膨大にあつまる上海の1949年以前の都市史史料にいつものことながら圧倒される。

- ③ 2004年10月20日に第1回アジア生態学会が韓国の木浦で開催され、現代都市社会研究センターの研究者である達良俊教授が出席し、The Application of Approx-natural Restoration Method in Urban Ecosystem of Shanghai, East China を発表した。
- ④ 2004年10月26日から27日にかけて、四川省社会科学院社会学所と四川省『分憂』雑誌社が主催した「農民労働者の都市住民化プロセス理論の討論」に現代都市社会研究センターの研究者である陳映芳教授が出席し、「農民労働者の都市住民化プロセス」のテーマで発表した。
- ⑤ 2004年11月29日～12月3日に蘇州でアジアヨーロッパ都市林業国際シンポジウムが開催され、現代都市社会研究センターの研究者である達良俊教授が出席し、「上海都市の生態系を自然型に回復させるプロセスとその方法」というテーマで発表した。

【ホームページおよびニューズレター】

ニューズレター13号(8月20日発行)、14号(9月20日発行)が順調に発行された。いずれもホームページにアップしている。

10月に中国語版のホームページがアップされた。<http://www.urban-studies.com/>

【共同研究員】

水内、中生両名が、森田洋司につき、上海サブセンターである現代都市社会研究中心の共同研究員になった。

北京・サブセンターについて

井上 浩一

平成16年4月1日～12月1日の活動記録は以下のとおりである。

1) 中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定

平成16年4月28日に中村研究科長が中国社会科学院歴史研究所(以下、歴史研究所)を訪問し、「中国社会科学院歴史研究所・大阪市立大学大学院文学研究科学術交流協定」(資料1、日本語訳)が締結された。

同協定は教育および学術研究上の交流に関する包括的な取り決めであるが、中村研究科長と陳祖武所長は、SARSのため延期されていた北京・サブセンターの設置についても協議し、サブセンターの整備およびサブセンターを軸とした共同研究については、「学術交流協定」第2条に基づきつつ、今後具体化することを確認した。

2) 歴史研究所との協議

上記の「学術交流協定」および合意事項に基づき、7月27日に井上浩一(COE事務局)と井上徹(Aチーム)が歴史研究所を訪問し、サブセンターの設置、共同研究について具体的な協議をした。歴史研究所側の出席者は、陳祖武(所長)、劉栄軍(副所長、党委書記)、斎克琛(科研処長)、卜憲群(所長助理)、楊振紅(副主任研究員)の各氏である。

協議に際して、都市文化研究センター側の見解・申し入れ事項をまとめた『共同研究に関する覚書』を作成し、その中国語訳を歴史研究所側に手渡した(資料2「覚書」日本語原文)。他に、『学術交流協定(中国語原文)』、『都市文化研究センター組織図』、『都市文化研究センター成果一覧』も配布した。歴史研究所からは『歴史研究所紀要』第2号(2003年)が配布された。

協議の経過と結果は次のとおりである。

1. 経過説明と歴史研究所の回答

『覚書』等配布資料に従って、都市文化研究センターの活動経過および今回の訪中の目的を説明した。歴史研究所は、都市文化研究センターの組織・活動内容についてよく理解できた、学術交流・共同研究についても基本的に了解したと回答した。

2. 共同研究についての具体的な申し入れと歴史研究所の回答

以下の4点の申し入れに対して、歴史研究所側から回答があった。

①研究員の招聘

(申し入れ) 歴史研究所の若手研究員・院生を、都市文化研究センターに招聘し、共同研究を行ないたい。旅費・滞在費は都市文化研究センターが負担する。ただし、本年度は予算の都合で長期招聘はで

きない。

(回答) 派遣させていただく。若手研究員・院生以外の者も派遣の対象とさせて欲しい。

②研究員の派遣

(申し入れ) 都市文化研究センターから研究者を派遣して共同研究を行ないたいので、受け入れをお願いしたい。旅費・滞在費は都市文化研究センターが負担する。

(回答) 研究員の受け入れは了解した。社会科学院には世界史研究所もあり、日本史・西洋史の研究者とも交流ができる。

③インターナショナル・スクール

(申し入れ) 2004年9月21～24日開催予定のインターナショナル・スクールに講師を1名派遣して欲しい。講義テーマは「都市または都市文化」である。講師の旅費・滞在費は都市文化研究センターが負担する。

(回答) 了解した。人選については8月中旬までに回答する。

④共同研究

(申し入れ) 上記の①～③も含めて今後共同研究を進めてゆきたいが、共同研究の内容について歴史研究所のご意見を伺いたい。

(回答) 歴史研究所内でさらに検討して9月中旬までに回答する。歴史研究所は来年度に大型研究プロジェクト(担当者、楊振紅副研究主任)を申請中であり、都市文化研究センターとの共同研究の具体的な内容や責任者については少し回答を待って欲しい。

3. サブセンターの設置についての申し入れと歴史研究所の回答

①HP を中心としたヴァーチャル・オフィス構想

(申し入れ) 北京・サブセンターはHP を中心としたヴァーチャル・オフィスとしたい。歴史研究所のHP に都市文化研究センターのページを作成していただき、我々のHP とリンクをお願いしたい。

(回答) 了解した。作成は少し待って欲しい。

②歴史研究所内にPC の設置

(申し入れ) 歴史研究所内にサブセンター専用PC をおきたいので、設置場所を提

供して欲しい。設置するPC および付属品(含むソフト)は都市文化研究センターの予算で購入するが、日常的な管理は歴史研究所をお願いしたい。

(回答) 具体的な設置場所は即答できないが、間違いなく確保する。サブセンターの設備面については、劉榮軍副所長が責任者となり、楊振紅副主任研究員と相談してPC 購入などを行なう。総額は30万円くらいになるだろう。PC の維持管理についても了解した。

3) サブセンターの共同研究体制と備品整備

27日の協議を受けて、7月30日に井上徹が中国社会科学院歴史研究所を再度訪問し、歴史研究所側の共同研究体制の確認とサブセンターの備品設置を行なった。

1. 歴史研究所側の共同研究体制

ト憲群(歴史研究所所長助理) 総括責任者
齊克琛(科研处处长) 学術交流の対外総括責任者(事務担当)

楊振紅(副主任研究員) 都市文化研究センターとの連絡担当

ただし、楊振紅氏は2005年度から実施予定の大型研究プロジェクトの責任者とされているため、上記の体制に変更があるかもしれない。

2. サブセンターの設備

歴史研究所の「秦漢魏晋南北朝史」研究室にパソコン(ソニーVAIO TR5, 含むソフト)を設置した。周辺機器として、USB メモリー(128MB)と3.5インチFDD も整えた。費用総額は20,768元=284,522円である。日常管理は楊振紅氏が担当する。なお、HP 作成ソフトについては、HP が情報処理部門の管轄であることにより、今回は購入・設置を見送った。

4) インターナショナル・スクール講師招聘

8月19日に歴史研究所から、7月27日の協議において合意されていたインターナショナル・スクール講師として、牛来穎氏を派遣する旨連絡があった。招聘期間9月17日～27日、身分は文学研究科客員助教授(受け入れ責任者、中村教授)である。

9月22日に牛来穎講師の講義「中国唐宋時代の都市空間と社会」が行われた。

5) 共同研究およびHP についての最終的な合意

1. 歴史研究所「共同研究計画に関する意見書」

9月10日に歴史研究所より「共同研究計画

に関する意見書」(資料3, 日本語訳)が届いた。歴史研究所側は日本側研究者の受け入れに最大限の便宜をはかることを約束するとともに、本格的なHPを作成したい旨表明している。

2. HP作成についての歴史研究所の具体的提案

10月28日付で、歴史研究所よりHP作成について、次のような具体的提案があった。

①HP「城市史研究」の開設については、当初見積もりで、2万元前後が必要である。

②2万元の内訳

1. 専門技術員によるHP作成, ソフト購入, 各種設備の借用経費。
2. 研究者に委託して, HPに掲載する資料の収集, 管理, 保持, 掲載する文章に対する報酬(原稿料)

3. 都市文化研究センター側の対応と提案

上記の申し入れについて、11月10日の第28回センター会議で検討した。歴史研究所の積極的な意思は尊重したいが、本年度予算での2万元の支出は難しいので、来年度にまたがって執行する。その点も含めて予算面についてはさらに先方と交渉する。HPには①日本における中国都市史研究文献目録, ②大阪都市史研究文献目録, ③各種史料集などを掲載することを確認した。

上記センター会議の方針に基づき、歴史研究所に次の2点を通知した。

①2004年度に8000元を支出する。

②次年度以降も経費を提供するが、金額は今年度の実施状況を見て決定する。

4. HPに関する最終合意

11月15日に歴史研究所の責任者より、上記の申し入れに対する次のような正式回答があった。

「貴校の支援と援助に大変感謝申し上げます。私たちはできる限り早くにホームページを開設します。貴校より提供される経費は謹んで使用させていただきます。貴校が提示されたように、翌年度の経費提供につきましては、今年度の状況を見てから決めるものとします」。

都市文化研究センターの提案は了承されたものと判断し、早速、HP作成にとりかかってもらうよう、歴史研究所の連絡係楊振紅氏に依頼した。

6) 研究者の招聘

12月1日に歴史研究所から都市文化研究セン

ターへ劉馳氏(魏晋南北朝時代史専攻)を派遣したい旨連絡があった。同氏の経歴・業績等については追って履歴書が送られてくる。招聘期間等については今後協議のうえ決定する。

資料1

「中国社会科学院歴史研究所・大阪市立大学大学院文学研究科学術交流協定」(日本語訳)

中国社会科学院歴史研究所と大阪市立大学大学院文学研究科は双方の教育及び学術研究上の協力関係を推進するために、とくに学術交流に関して、以下の合意に達した。

第一条 中国社会科学院歴史研究所と大阪市立大学大学院文学研究科は、双方の教育及び学術研究事業を促進発展させるために、双方の専門範囲内で、以下の形式の交流活動を行うことに同意する。

1. 専門問題の共同研究, 協力授業, 学術討論会などの活動を行い, あわせてこれと関連する学者の交流を実施する。
2. 双方が関心を有する学術領域で, 資料と情報を交換する。
3. 研究生院(大学院)博士生を中心とする交流を推進する。

第二条 この協定書を基礎に、交流を実施する際には、あらゆる具体的項目及び具体的事務に関して、双方の責任者が別途取り決めを行う。

第三条 本協定書を実施する過程で、双方は随時意見交換を行い、双方が一致を見れば、協定書に対して調整を行う。

第四条 本協定書は双方署名の日を以って発効し、有効期限は三年とする。満期後、双方の協議のうえ合意あれば継続を可とする。いずれか一方が本合意を終了する際には、六か月以前に文書を以て他方に通知する。

第五条 本議定書は、漢字文とする。

中国社会科学院
歴史研究所
所長 陳祖武
2004年4月28日

大阪市立大学大学院
文学研究科

科長 中村圭爾
2004年4月28日

資料2

共同研究に関する覚書（日本語原文）

2004年7月27日

大阪市立大学文学研究科
都市文化研究センター

1. 中国社会科学院歴史研究所と大阪市立大学大学院文学研究科の共同研究に関する従来の経緯

(1) 都市文化研究センターUrban Culture Research Center の設立

大阪市立大学文学研究科は 2002年10月に文部科学省「21世紀 COE プログラム」の研究拠点「都市文化創造のための人文科学的研究」として全国20拠点のうちのひとつに選択された。文学研究科では、大阪市立大学の全面的な支援のもとに、研究科内に研究拠点「都市文化研究センター」を設置し、研究プロジェクトを推進してゆくことになった。このプロジェクトの計画期間は2002年10月～2007年3月である。

この都市文化センターでは、三つの研究教育チーム、A：比較都市文化史研究、B：現代都市文化研究、C：都市の人間研究、を設け、学術交流協定を締結した諸大学の研究者と協力して、都市に蓄積されてきた文化的伝統を歴史的に解明する基礎研究を踏まえ、都市文化の現状解明や、現代都市の諸問題への実践的な取り組みを唱導する研究を行っている。これらの研究を客観的に進めるため、アジア的視点による都市の文化的研究を重視し、そのため西欧のみならず東・東南アジアの主要大学の所在都市（北京、上海、バンコク、ジョクジャカルタ、ハンブルク、ロンドン）にサブセンターを置きネットワークで結んで研究を進めている。また、各チームは研究機能とともに教育機能を有し、将来この分野の研究を担い、本拠点の研究を継続しうる若手研究者を育成している。

(2) 三つの研究教育チームのうち、「A：比較都市文化史研究」は都市文化に関して、比

較史の手法を用い、多様な角度から分析を進めているが、そのうちの重要な一つの項目は、「前近代の日本と中国における都市の比較史的研究」（責任者：中村圭爾先生）である。この研究テーマに基づいて、貴研究所と共同研究を進め、その成果として、『中日古代都城研究』が刊行された。貴研究所のご協力に感謝したい。

(3) 本年4月28日、貴研究所と本学大学院文学研究科との間で、学術交流協定が締結された。双方の調印の責任者は、歴史研究所所長・陳祖武先生と文学研究科科長・中村圭爾先生である。協定の内容は別紙を参照していただきたい。

2. 今後の共同研究の推進について

(1) 今後、学術交流協定に基づいて、貴研究所と共同研究を推進することになるが、当面は、都市文化研究センターが貴研究所と連絡をとりあって、共同研究を推進すること

(2) 学術交流協定に含まれる、その他の学術交流（都市文化研究センター以外）については、必要に応じて、貴研究所と文学研究科のあいだで協議を行うこととする。

(3) 北京サブセンターの設置設備について

第1に、パーソナルコンピューターを貴院に設置し、関連するソフトをインストールしたい。必要経費は都市文化研究センターが負担することとする。また、設置場所については、貴研究所の側で適切な場所を提供していただけると、ありがたい。

第2に、都市文化研究センターでは、中日比較都市史に関わるデータベースを作成し、本学 COE のホームページ上に掲載する。貴研究所の側においても、可能であれば、このテーマに関するデータベースの作成にご協力いただきたい。また、貴研究所と都市文化研究センターとの間でインターネットを通じて情報交換ができるようなシステムを順次整備していくことが望ましい。

(4) 研究交流について

都市文化研究センターは、共同研究の一環として、貴研究所の研究者等を招聘し、また貴研究所を訪問し、調査を実施する計画をもっている。研究者の相互交流を通じて、今後、適切な共同テーマを設定し、研

究を進めていくことになる。これらの共同研究の事業について、ご協力いただきたい。

資料3

共同研究計画に関する意見書（日本語訳）

2004年9月10日
中国社会科学院歴史研究所

一、双方が協力関係を強めて学術文化交流を促進するという理念を受けて、定期的な人材交流計画を実施する。本歴史研究所は、日本側が提示した要求に対応し、まずは三つの交流計画を議定したい。

1. 来年より、毎年1名あるいは2名の日本の若手研究者を招聘し、本研究所で研修させる。
2. 本研究所が都市史研究に関連する学術活動を主催するに際しては、日本側研究者を招聘し、関連する研究テーマについて学術報告をしていただく。
3. 日本側研究者が本研究所で資料を閲覧し、また学術的な目的で訪問する場合には、可能な限り、一切の便宜を図ることとする。

二、双方の連携を強め、研究資源を共有し、及び学界に対して私たちの共同研究成果を公開するために、本研究所は本年10月に「都市史比較研究」のホームページを作成する業務を始動し、このホームページを本研究所のネット上に開設する。ホームページの内容は以下の項目を包摂する。①双方の基本的な研究概況、共同研究の状況及び当該の研究に参加する人員の状況を紹介する。②都市史研究の最新の動向を紹介し、双方の研究成果を提示する。このホームページは、貴校の関連するホームページ、世界の著名なホームページとリンクを張る。

備考：ホームページ開設の事業については、日本側の資金援助を希望する。

三、来年6月以前において、本研究所は本社会科学院に対して、「中国古代都市研究」という大型プロジェクトを申請する計画をもってい

る。このプロジェクトは本研究所のすぐれた人材と資料を活用し、本研究所の研究人員を主体として、参加を希望する全国の関連するジャンルの専門家を集めて、研究グループを編成する。この研究グループの設置は、おおよそ次のいくつかのジャンルを包括している。

1. 都市史資料の整理と編集。
2. 都市史研究の論著索引（文献目録）の編集。
3. 先秦から明清時代に至る都市史研究。
研究内容は、中国古代都市の起源と特色、各時期の都市の配置と建設、都市生活、都市と農村との関係、都市と商品経済との関係、都市の地位、中国古代都市と近代化、同じ歴史時期におけるその他の国家の都市との比較など。
4. 「都市史研究」のホームページの制作と管理を行う。

以上の大型プロジェクトはさしあたり5年計画とする。

備考：当該のプロジェクトが批准された場合には、本社会科学院が関連の経費を支給する。

バンコク・サブセンターについて

山野正彦

バンコクサブセンターの運営は、設置場所であるチュラロンコン大学芸術学部の温かい支援もあって順調に推移している。環境モノグラフ調査で訪れるCOE事業推進担当者やCOE研究員、研究者交流で訪れるジョクジャカルタからの研究者などの利用に供されている。またフォーラム開催準備、フォーラム報告書の作成、タイから大阪への招聘研究者に関する諸事務などの拠点となっている。

本年（平成16年）度のアカデミック・フォーラムは2004年12月8日（水）にサブセンターに近いパトムワン・プリンセスホテルの会議室を会場として開催された。本年度のテーマは“Cultural Heritage and Urban Tourism”であり、日本側からの山野正彦とタイ側からの

Kukdej Kantamara の二人がオルガナイザーを務めた。都市の文化創造とツーリズムの発展の問題は先進国・開発途上国を問わず現代の重要な課題である。幸い会議は日本、タイのほか、インドネシア、フィリピンなどからの参加者を含め、合計46名の出席者を集めた。午前9時から午後4時まで中川眞の司会により下記のとおり合計6名の発表（英語）と討論（英語、日本語、タイ語の通訳あり）が行われたが、どの発表も現代のツーリズムの抱える諸問題に焦点を当て、またタイとインドネシアの事象を題材とするものであったことも手伝って、的が絞られたせいか質疑応答も活発であった。まとまりの良い引き締まった会議となったことで、有意義で実り多いフォーラムになったと考えている。発表の内容は来年度英文で出版の予定である。

フォーラム発表者と発表題目

1. 山野正彦（大阪市立大学・COE 事業推進担当者）“The Traiphum Cosmology in Thai Mural Paintings and Cultural Tourism”
2. Pongsak Vadhanasindhu（チュラロンコン大学建築学部）“Urban Waterway Tourism and Waterfront Development”
3. Naraphong Charassiri（チュラロンコン大学芸術学部）“Light & Sound and Cultural Tourism”
4. 山口智（大阪市立大学・COE 研究員）“The Revival Movement of Lanna Thai Culture”
5. Tjahjono Prasodjo（ガジャマダ大学文化科学部）“Cultural Heritage and Tourism in Yogyakarta and Central Java: An Archaeological Perspective”
6. Nopant Tapananont（チュラロンコン大学建築学部）“The Diversity of Tourism and Urban Development in Bangkok”

ジョクジャカルタ・サブセンターについて

中川 眞

ここでは継続的な共同研究と、イベント「第3回アカデミック・フォーラム」、主にこの2点についての報告を行う。

共同研究は、昨年度に引き続き「環境モニタリング調査」の一環として、ジョクジャカルタ・サウンドスケープ調査を遂行し、大阪市立大学からは中川眞が、インドネシア芸術大学からは民族音楽学科・科長のブディ・ラハルジョ氏並びに同学科の学部生が参加して、ジョクジャカルタ市内の3カ所における定点観測（朝昼晩の3時間帯の録音と、騒音計による音量調査）を行った。また、10月19日～11月4日の中川滞在時には、王宮区域をはじめ、数カ所においてインテンシブな聞き取り調査を行った。定点観測等は2005年の12月に終了し、来年度に向けて、資料のとりまとめと成果の発表を行う予定である。

11月3日にガジャマダ大学マルチメディア室において、第3回アカデミック・フォーラムが開催された。テーマは「Tourism and Education」で、日本、インドネシア、タイからの発表者計7名の他、約70名の専門家による参加者を得て、午前8時30分より午後3時まで行われ、盛会裡に終了した。例年は午後5時近くまで行われるのであるが、ちょうどラマダン（断食）月間中であったため、昼食時間を大幅に削るなどして、進行を前倒しにした。テーマの趣旨は以下の通りである。

本アカデミック・フォーラムでは、「観光」に対して「教育」という補助線を引くことによって、観光をひと味違った角度からとらえてみることを試みた。このテーマのもとで論じたい点は、以下の2つである。

- (1) ツーリズムに関する教育
- (2) 教育としてのツーリズム

理想的には、そのどちらかに絞って論じることが望ましいが、ツーリズムが教育に対して持ちうる2つの側面（教育されるツーリズムと教育するツーリズム）を同時に論じることによって、その両方の視点に何か資するものを見出したいと思った。(1)については、学科や学部という教育システムの開設の点ではまだまだ少数派である観光学について、その対象や方法論のみならず、実際の教育システムにおけるカリキュラムや学習方法等について論じた。(2)ではエコ・ツーリズムに代表される、観光が教育となり得る点について、特にポジティブな側面に光をあてて論じた。日本では修学旅行も「観光＝教育」の大きな伝統であると思われる。

なお、本フォーラムでは結果的には主として

第2の側面すなわちエコ・ツーリズムが重点的に論じられた。基調講演は Danang Parikesit (ガジャマダ大学研究センター長) と中川眞が行い、発表者は、日本から清水苗穂子 (大阪市立大学大学院文学研究科大学院学生)、松村嘉久 (阪南大学国際コミュニケーション学部助教授)、インドネシアから Windu Nuryanti、(ガジャマダ大学観光研究センター)、Heddy Shri Ahimsa Putra、(ガジャマダ大学文化科学部)、Arif Eko Suprihono、(インドネシア芸術大学メディア情報学部)、Suastiwi, M.Des. (インドネシア芸術大学美術学部)、タイから Narumon Arunotai (チュラロンコン大学社会調査研究所副所長) という陣容であった。

今回からタイの発表者を招聘したが、バンコクとジョクジャカルタ間の拠点交流を促進し、より広範囲のネットワークをつくるためである。また、本フォーラムは、バンコクで12月8日に行われたフォーラム「Cultural Heritage and Urban Tourism」と緩やかに問題意識を共有するものである。

最後に、2005年に入ってから、本年度の招聘研究者2人 (ガジャマダ大学文化科学部教員と同博士課程学生) が来日し、都市文化に関する研究を行う予定である。

ハンブルク・サブセンターについて

栄原 永遠男

〔① 2004年9月3日～9日〕

はじめに

2004年9月3日 (金) ～9日 (木) に、ハンブルク・サブセンターを中心に行ったハンブルク大学との共同事業・共同研究について、時間の経過にしたがって報告する。

ハンブルクを訪問した一行は、つぎの5名である。

金児曉嗣 (COE 事業推進担当者, 副リーダー, 都市文化研究センター副所長, 大阪市立大学学長)

阪口弘之 (COE 事業推進担当者, 拠点リーダー, 同所長, 大阪市立大学大学院文学研究科教授)

松村國隆 (COE 事業推進担当者, 同教授)

高梨友宏 (COE 事業推進協力者, 同助教授)

栄原永遠男 (COE 事業推進担当者, 副リーダー, 都市文化研究センター副所長, 常任委員長, 同教授)

9月3日 (金)

10時30分、オーストリア航空 OS56便で関西国際空港を出発し、ウィーンを経由して OS171 便 (チロリアン航空による共同運航) にてハンブルク空港に19時40分 (現地時間) に到着した。

9月4日 (土)

午前中に5人そろってハンブルク・サブセンターに行き、備品のチェックを行い、紛失物がないことを確認し、パソコンその他がまちがいでなく動くことを確かめた。また、消耗品等の保管状況を調べ、プリンタのトナー、FD を補充する必要があることがわかった。これは、次の訪問者に託すこととする。シンポジウムの録音用機材の点検を行い、電池、メディア等をチェックした。

次に、設置のパソコン2台 (Sony VAIO PCV-RX203ドイツ仕様, FUJITSU SIEMENS MT8-D1327) に、ウィルスバスター2004をインストールした。お客様番号は J-04-04315733, 有効期限は2005年9月30日である。阪口弘之の名前で登録した。

ハンブルク大学のローラント・シュナイダー教授と5人で懇談した。まず、ハンブルク大学で現在進行している大学改革の現状について説明を受けた。つぎに、今後の大阪市立大学とハンブルク大学の学術交流、共同研究、サブセンターの運営などについて意見交換を行った。その結果、今後もこれらを維持・継続していくために、両大学がさまざまな工夫をこらし、情報交換をしていくことで合意した。

9月5日 (日)

松村・高梨の両名はサブセンターにいき、シンポジウムのレジュメおよび資料の作成、それらのドイツ語訳の作業を行った。金児・阪口・栄原はホテルでそれぞれの報告の準備を行った。また、全員でシンポジウムの運営について打ち合わせをした。録音マイクの電池を購入した。

9月6日 (月)

松村、高梨の両名は午前中にサブセンターに行きシンポジウムの準備を続けた。5名全員サブセンターに集合したあと、13:30にハンブルク商工会議所3階のアルベルト・シェーファー広間に入った。

大阪市・ハンブルク市主催、ハンブルク日本総領事館後援のシンポジウムに出席した。そのプログラムは以下の通りである。

大阪・ハンブルク姉妹都市提携15周年記念シンポジウム「大阪とハンブルクー現在と未来」

開会の辞 ハンブルク商工会議所副会頭 ニコラウス・W・シュエス「ハンブルクー経済面から見た成長する都市：日本・ハンブルク経済交流」

開会の辞 自由・ハンザ都市文化担当相 カーリン・フォン・ヴェルク教授「ハンブルクの独日文化交流の貢献」

開会の辞 大阪市会議長 新田孝

挨拶 日本総領事 三木達也

講演 大阪市長 關淳一「大阪ー今日と明日」

講演 ハンブルク大学教授・大阪市立大学名誉博士 ローラント・シュナイダー「大阪とハンブルクー姉妹都市提携15周年記念に思うこと」

寿司休憩

映像上映 「映像による都市大阪の魅力」

映像制作者・奥村美恵子の解説

英語による落語 落語家 笑福亭鶴笑

16:30に閉会した後、高梨はサブセンターにもどり、他の4名は18:45ごろ市役所に行き、19:00からのハンブルク市主催のレセプションに出席した。

挨拶 オーレ・フォン・ビュースト・ハンブルク市長

挨拶 關淳一・大阪市長

9月7日（火）

9:50、大阪市代表団をアジア・アフリカ研究所の玄関ホールで出迎えた。

ローラント・シュナイダー教授の歓迎の挨拶
日本学科教員スタッフならびに学生の紹介
図書館内の大阪文庫見学

2階廊下に展示されている「職人歌合」の解説
大阪市立大学サブセンター（106号室）の見学

10:20からアジア・アフリカ研究所大講堂（3階221号室）にて、歓迎会

ハンブルク大学副総長ホルガー・フィッシャー教授「歓迎の挨拶と大学の紹介」

新田孝大阪市会議長「ご挨拶」

代表団の紹介

団長 關 淳一 大阪市長

副団長 新田 孝 大阪市会議長

団員 大丸昭典 自由民主党・市民クラブ

大阪市長

山本修子 民主党・市民連合大阪市長

高田雄七郎 公明党大阪市長

矢達 幸 日本共産党大阪市長

田中ゆたか 自由民主党・市民クラブ

広岡一光 民主党・市民連合

随行者 阿辻 豊 市会事務局

木村 勇 市長室国際交流担当部長

野村勝久 市長室秘書部アジア・欧州外事担当課長

望戸弘道 市会事務局議事課担当係長

北吉秀輔 市長室秘書部国際交流課担当係長

ローラント・シュナイダー教授「歓迎の挨拶と姉妹校の歩みについて」

關淳一大阪市長「ご挨拶とシンポジウム開会の辞」

11:20 代表団の見送り

休憩

11:30 日独共同シンポジウム「ハンブルクと大阪：都市と市民、文化と大学」開会

11:30 金児暁嗣大阪市立大学学長「基調報告」

11:50 阪口弘之教授「大阪市立大学の上方文化講座ー世界と市民のための文楽」

12:25 アンドレアス・レーゲルスベルガー「大阪と浄瑠璃」

12:55 ハンブルク大学からの大阪市立大学留学生の同窓会

昼食

14:28 再開（会場を2F109室に移す）

14:30 栄原永遠男教授「古代の港湾都市難波」

14:55 マンフレッド・ポール教授「ハンブルクの港：歴史的経済学的論理に対立する発展の成果」

休憩

15:50 松村國隆教授「都市市民と歌謡」

16:15 ユーディット・アロカイ助教授「上田秋成と大坂の精神」

16:40 高梨友宏助教授「都市理念の人間学ー『都市格』概念をめぐるー」

17:00 ローラント・シュナイダー教授「まとめ

と閉会の辞」

これと平行して、14:30から、金児暁嗣学長が、ホルガー・フィッシャー副総長を表敬訪問し、両大学の改革の現状について情報交換するとともに、今後の学術交流について意見交換をした。ハンブルク大学の改革案の文書の寄贈を受けた。これは、今後の大阪市立大学の改革にも参考になると思われる。

終了後、外アルスター湖北岸の風光明媚な地にある日本国総領事公邸で行われたレセプションに5名全員が出席した。

9月8日（水）

オーストリア航空 OS176便（チロリアン航空による共同運航）でハンブルク空港を11:00に離陸し、ウィーン・シュベヒャート国際空港にて出国手続きをした。

9月9日（木）

OS55便にて7時46分に関西国際空港に到着し、帰国手続きをとった。

むすび

以上の経過からうかがえるように、今回の訪問には、3つの側面が併存していた。

第1は、大阪市立大学都市問題研究（旧名プロジェクト研究「大阪市とハンブルク市をめぐる都市・市民・文化・大学」、平成14年度から3年間）の側面である。今年度が都市問題研究の最終年度に当たることに鑑み、成功裏に日独共同シンポジウム「ハンブルクと大阪：都市と市民、文化と大学」を開催することができた。この内容は、今年度中に報告書（日独両国語）として刊行する予定である。

第2は、COE事業の側面である。大阪市立大学とハンブルク大学との大学間の学術交流協定を基礎として、大阪市立大学大学院文学研究科のCOE拠点である都市文化研究センターと、ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科とが、上記の国際シンポジウムを成功裏に共同開催できたことにより、共同研究の基礎をさらに固めることができた。

また、サブセンター（106号室）を共同でどのように運営していくかという点について率直に意見交換することができたことは、幸いであった。両大学で進行中の大学改革の状況を見ながら、この点については今後も継続して議論していく必要がある。

第3は、大阪市立大学学長の表敬訪問の側面である。9月7日午後のハンブルク大学副総長と

の会見により、両大学の相互理解と交流のきずなはさらに深まった。

これは、同日午前の大阪市長を団長とする大阪市代表団のハンブルク大学表敬訪問と連動している。これにより、大阪市立大学大学院文学研究科とハンブルク大学日本学科との学術交流、サブセンターの実情とその活動について理解が得られたものと考えられる。

さらにこの側面は、大阪市・ハンブルク市共同主催のシンポジウム（9月6日）への参加、ハンブルク市主催（9月6日）と日本国総領事館主催（9月7日）の2つのレセプションへの出席とも関係している。

全体として、今回の訪問は、所期の目的を達成することができたと考えられる。

〔2004年11月1日～8日〕

はじめに

2004年11月1日（月）～8日（月）に、栄原は、ハンブルク・サブセンターの整備、国際ワークショップに出席するため、ハンブルク大学を訪問した。その際の活動を報告する。

11月1日（月）

11:00発のオランダ航空 KL868便で関西国際空港を出発し、アムステルダム・スキポール空港を経由して KL1789便にてハンブルク空港に19:15（現地時間）に到着した。

11月2日（火）～4日（木）

毎日サブセンターに通い、掃除、備品点検、整備などを行い、報告の準備ならびに研究に従事した。この間、随時、日本学科の教員と交流した。

11月4日（木）～6日（土）

Asia-Europe Foundation(ASEF)の資金による国際ワークショップ Port Cities and City-States in Asia and Europeに参加し（会場はハンブルク大学アジア・アフリカ研究所3F221室）、The Port of Osaka: from ancient times to today の報告を行った。

11月7日（日）～8日（月）

オランダ航空 KL1780便でハンブルク空港を7日の12:16に離陸し、アムステルダム・スキポール空港にて出国手続きをした。KL867便にて8日の9:21に関西国際空港に到着し、帰国手続きをとった。

ロンドン・サブセンターについて

高梨 友宏

1. サブセンターの利用

市川美香子教授が、平成16年6月22日から7月20日まで、同センター(ロンドン大学東洋アフリカ学院の349室)を利用して、研究を行った。研究のテーマは、「世紀転換期イギリス社会史」であった。なお、この訪問に際しては、図書館、IT利用のために、阪口弘之教授(COE事業推進担当者・拠点リーダー)がピーター・ロブ教授(ロンドン大学東洋アフリカ学院副学長)宛に推薦状を出し、同学院内のLANのユーザー名、パスワードとロンドン大学の図書館のパスの発行を受けた。また、349号室は東京外国語大学の史資料ハブ地域文化研究拠点との共同利用であるため、「ロンドン大学 SOAS の349号室の共同利用に関する覚書」に基づき、事前に部屋使用の調整を行った。

市川教授は、ソアズの諸施設や図書館の利用法、サブセンター内のパソコン等の使用法についてのメモを、日本の都市文化研究センターに送っている。今後のサブセンター使用者にとって大いに役立つと思われる。

2. 今後の利用に関する見通し

ロンドン大学のアンドリュー・ガーストル教授との間で進められている上方役者絵の展覧会開催事業が、平成17年10月～11月に大阪歴史博物館で開催される見通しである。なお、同じ内容の作品展は、これに先立ってイギリス大英博物館の一室で開催されることになっている。この事業(大阪展)の推進のための打ち合わせなどをする必要があり、関係者がロンドンに赴いてサブセンターを利用することになるはずである。もっとも、現時点では具体的・確定的な見通しを述べることはできない。

ホームページ委員会

水内 俊雄

COE全体の活動評価が、ホームページを通じて行われている傾向がますます明白になり、本

業務の重責はますます重くなってきている。というのも、1993年より3年間COEのデンマーク版をとったコペンハーゲン大学が、ポストCOEで日本の大学との提携をEUのジャパンイヤーにあわせて追求しているなかで、本UCRCの英語サイトが非常に有益な情報を与えてくれ、わざわざ見学にまで来られたことがあった。ホームページをきっちり充実させることの重要性を改めて認識している。

平成16年8月にトップページを全面改訂し、よりグローバルに展開するサブセンターの位置づけが視覚的にわかるように工夫した。サブセンターでは、上海側で中国語のHPが立ち上げられ、北京サブセンターも中国側のホームページがまもなく立ち上げる予定となっている。また更新状況も、ほぼ活動のすべてが、ホームページ委員会に吸い上げられ、日本語、そして英語と、時間をおかずにあげる体制が構築できたと自負している。しかしこうした情報の吸い上げ作業をより円滑に行うためにも、企画者のすみやかな情報の開示を切にお願いする次第である。とは言え、中間評価では、「英語による公表、英語によるホームページの整備は不可欠だが、充実した内容、適切な英語表現がその前提である」という手厳しい指摘を受けている。委員会自体の責務は情報の授受とその公表にあり、掲載内容まで本来は立ち入ることはできないが、正しい情報、意味ある情報の通知を研究所研究員のみなさまにお願いしたい。

データベースについては、上海の地図データベースをより見やすいかたちにする整備の途上にあり、平成16年9月に一部公開をはじめている。上海のみならず、多くの地図データの蓄積が図られており、適切な電子ファイル化に若干時間を要しているが、年度内には多彩に閲覧できるように、準備中である。デジタルアーカイブを本格的に始動させるために、大阪や都市研究にかかわる資料を電子化する。重点研究でそろえたマイクロフィルムの電子化装置を活用し、年度内のアップをめざしている。出版物については、いつもどおり、都市文化研究の第4号をPDF化して閲覧に供している。

新たな試みとして、COEによる都市文化研究センターの存在やその発信について、高校生や受験生にも広報するために、10月11日に大学研究室出前紹介という形で河合塾が主催している学問ワンダーランドに出展した。この行事については、外部とのインターフェイスのインフラ

部門として、ホームページ委員会が責任主体となったが、今後とも、こうした類の広報活動も視野に入れてゆかねばならないであろう。

いつもながら、後方支援スタッフに感謝する次第である。

文学研究科叢書編集委員会

進藤 雄三

平成16年度の活動記録（続）

- 10月22日 第8回委員会
 議題1 叢書第3巻の編集・刊行について
 議題2 叢書第4巻以降の刊行計画について
 10月28日 清文堂と刊行形態について協議
 11月19日 第9回委員会
 議題1 清文堂との協議について
 議題2 叢書編集委員の追加について
 議題3 叢書第3巻の編集状況について
 議題4 叢書の編集名義について
 議題5 叢書第3巻以降の献本について

『都市文化研究』編集委員会

仁木 宏

1) 平成16年度委員

高梨友宏・土屋貴志（哲学）、仁木宏（歴史学、委員長）、川邊光一（心理学）、岩本真理・大岩本幸次（中国語中国文学）、イアン・リチャーズ（英語英米文学）

この他、編集委員会（会議）には、荒平みほ（編集補佐、COE事務局）が出席している。

2) 平成16年度後半の主な活動

（『都市文化研究』第4号掲載のニュース以降の活動）

〔編集委員会の組織〕

編集主任：第4号担当＝岩本真理

第5号担当＝大岩本幸次

チーム担当：A＝大岩本、B＝土屋、C＝高梨

〔査読体制〕

投稿された論文については、原則として、第1次・第2次の二度の査読を課すことにしてい

る。第1次査読では、1本の論文につき、編集委員1名、非編集委員（文学研究科教員）1名の2名で査読する。第2次査読は、編集委員各1名が担当する。

査読にあたっては、査読表を活用し、公正かつ正確な査読を期した。査読表はホームページ上に公開している。

査読を受けた論文を、他の論文類と区別するため、論文受理・採録決定の日付を明記した。[第4号について]

校正の過程で印刷所側のミスが相次いだため、原因を究明し、今後、そうしたことのないよう、編集委員会と印刷所の間で話し合いの場をもった。

[第5号について]

論文類の種類を明確にするため、各論文のタイトルの左上に、「論文」「研究ノート」「特別寄稿」などの文字を入れることとした。

ニュース部門では、インターナショナルスクール・重点研究について独自の項を立てた。

[3言語（日・英・中）併用体制]

21世紀 COE プログラム委員会の中間評価をうけて、3言語（日・英・中）を併用した雑誌とするための検討をおこなった。とりわけ、中国語論文が投稿された場合の査読方法、掲載手順などについて議論した。

今後、執筆要項に反映させてゆく。

3) 活動記録(平成16年12月3日現在)

（『都市文化研究』第4号掲載のニュース以降の活動）

平成16年

8月 6日 『都市文化研究』第4号の集中校正

9月30日 第4号納品

10月 6日 『都市文化研究』第5号投稿論文の第1次締切（論文6本の投稿あり）

10月 8日 第19回編集委員会

(1)第4号の反省

(2)第5号への投稿論文の第1次査読者の決定

(3)3言語併用体制について

(4)第5号の刊行スケジュールの確認

11月 5日 第20回編集委員会

投稿論文の第1次査読の結果決定→投稿者に書き直し指示

11月12日 特別寄稿・在外研究レポートの締切

11月22日 投稿論文の第2次締切（論文5本の投稿あり）

（次頁に続く）

12月 3日 第21回編集委員会

(1)投稿論文の第2次査読の結果決定

(2)第6号のスケジュール確認。編集主任は
高梨委員

同日 ニュース部門原稿の締切